

はじめに

へら専科が休刊になることを聞いて、大変驚きました。へら専科とのご縁は、2003年1月号からで、もう22年のお付き合いになります。この間、今回を含め3回の連載、毎月の読者プレゼントと、本当にお世話になりました。

3回目の連載は途中になり、まだまだウキ理論の解説を続けたかったのですが、最終回ということで、まとめ的なことを記しておきたいと思います。

1. 新しいエサ、新しい釣法がウキを変える

新しいウキが新しいエサを生み出すことはないと思う。逆に、新しいエサ、新しい釣法がウキを変えるというのが、流れではないかと思う。

具体的な例をあげれば、2015年頃一斉を風靡した「ドボ宙」、太目のボディに長いグラスムクのウキが開発され、その後、メーカー主催のトーナメントにおいて、縦サソイの規定が設けられたことから、縦サソイの回数を減らす、もしくは無くすることを目的にトップの長さはどんどん長くなっている。

また、2009年頃一斉を風靡した「パワー系浅ダナウドンセット」、浅ダナで大きく重いエサを支えることが必要であったことから、太目のトップが装着されるようになった。

上記は代表的な例ではあるが、「新しいエサ、新しい釣法が生み出されるたびに、それにあったウキの開発が進んでいく」のが通例である。

2. トップトーナメンターの方が製作するウキ

現代において、トップトーナメンターの方々製作するウキは、時代を反映した最先端のウキであると考えている。

その代表格が、萩野孝之氏の製作する「一志」ではないかと思う。今や両ダンゴウキの代名詞となった感のある「Dゾーン」は何度かのバージョンアップにより、時代を反映した最先端のウキであろう。釣り人にとって良いウキとは、「壊れない」、「見た目が綺麗」、「センターが出ている」等様々なポイントがあると思うが、やはり1番最初にあげられるのは、「釣れるウキ」であり、この意味からも、トップトーナメンターの方々が製作するウキは、まさに「釣れるウキ」なのである。

3. ウキの自作の勧め

浅ダナウドンセット、トーナメントでは必須の釣法であるが、この釣りのキモノひとつは、バラケエサのエサ付けである。

名人のバラケエサのレシピは、雑誌やネットで公開されており、誰でも知ることができるが、同じエサを使ったからといって、名人と同じ釣果が得られることはない。特に釣果に差が出る理由はバラケエサのエサ付けである。

Aさんが私の製作する浅ダナウドンセットのウキを使うと、「バラケをもう少しタナに入れ

たいので、ボディの肩の張り（角度）を緩やかにして欲しい。」との意見があった。Bさんが同じ浅ダナウドンセットのウキを使うと、「バラケが入りすぎるので、ボディの肩の張り（角度）を急にして、ブレーキがかかるようにして欲しい。」との意見があった。2人が使っているバラケエサは、今流行の「粒もじ」で、ブレンドはほぼ同じである。同じウキ、ほぼ同じエサを使用して真逆の意見、この理由はAさんとBさんのバラケエサのエサ付けの違いにある。Aさんは、握力が弱いのでバラケエサを「ふわっと」付ける。Bさんは柔道をやっていてることもあり、握力も強くバラケエサを「ぎゅっと」付ける。

何を言いたいかというと、その人のエサ付けにあったウキが理想だということである。

自分にあったウキ、それは自分で製作するのが1番である。

手前味噌になってしまふが、ウキを製作する時間がない方は、私がやっている「ウキの代理製作」というのも、ひとつの手段かもしれない。

最後に、へら専科編集部の皆様、22年間お世話になりました。

また、読者の皆様、拙い駄文にお付き合いいただきありがとうございました。